

蔵王町文化財調査報告書第2集

# 諏訪館前遺跡

2002年3月

蔵王町教育委員会

# 目 次

1. 周辺の遺跡と本遺跡の概要 .....	1
2. 調査にいたる経緯と調査方法 .....	3
3. 発見された遺構と出土遺物 .....	5
4. 遺物・遺構の検討 .....	15
5. まとめ .....	17
引用・参考文献	
写真図版	

# 例 言

1. 本書は、農道山の入寺前線の改良工事に先立つ、諏訪館前遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 本書における遺構・遺物の縮尺は以下のとおりである。
  - 遺構 .....
  - 遺物 .....
3. 本書における土色の記述は「新版標準土色帳」(小山・竹原 1973)に基づいている。
4. 本書の執筆は、佐藤洋一が行った。
5. 本発掘調査の出土遺物や記録、本書作成に関する資料は全て蔵王町教育委員会が一括保管している。

# 調 査 要 項

遺 跡 名 諏訪館前遺跡 (すわたてまえいせき) 宮城県遺跡地名表登録番号05014  
所 在 地 宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字諏訪館前  
調 査 期 間 平成13年5月15日・平成13年7月6日～8月28日 (実働19日)  
調 査 面 積 約500 m<sup>2</sup>  
調 査 主 体 蔵王町教育委員会  
調 査 員 蔵王町教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤洋一  
作 業 員 佐藤麻実子・鈴木里香・平間知子・村上和明

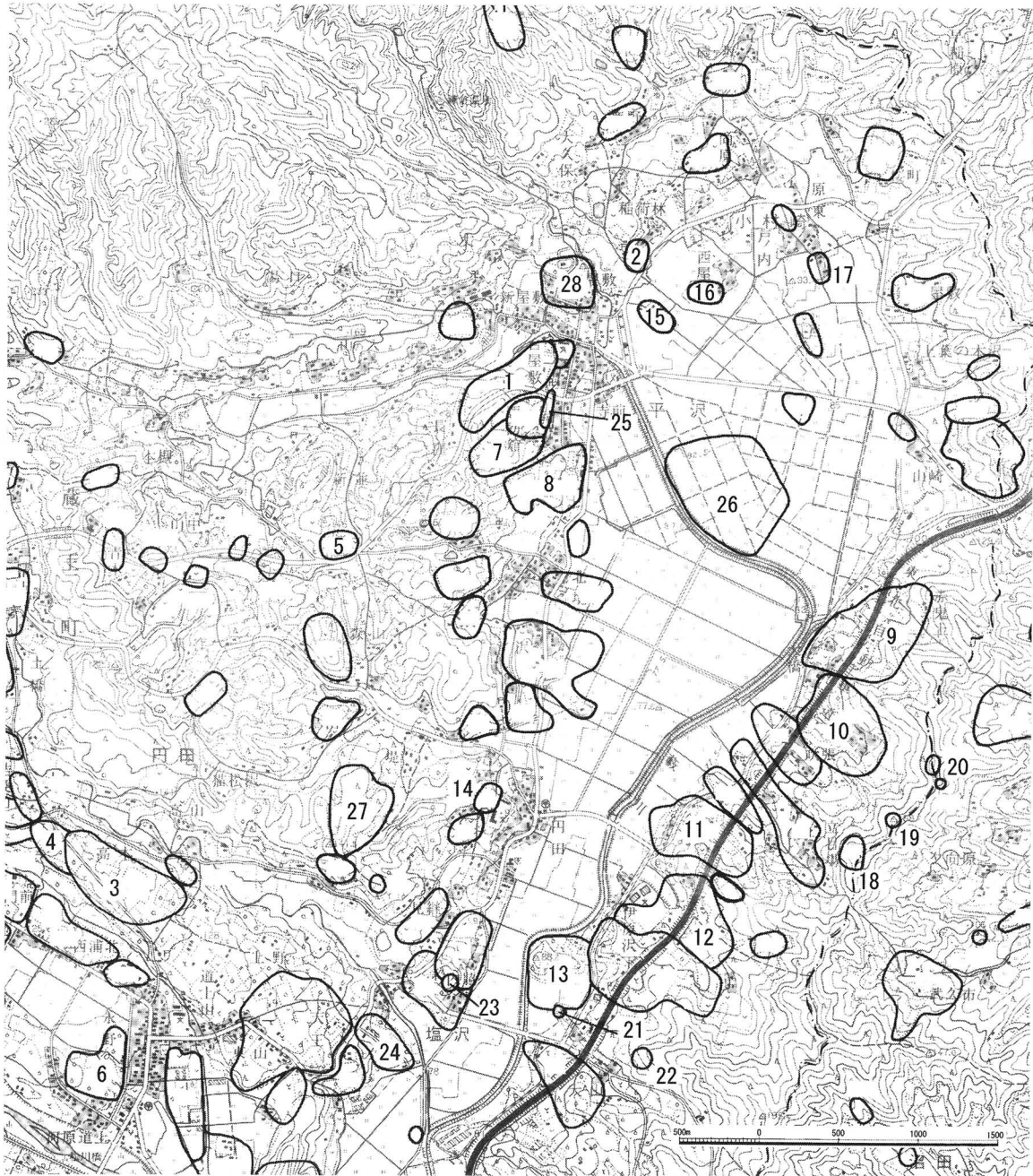
# 1 周辺の遺跡と本遺跡の概要

諏訪館前遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字平沢字諏訪館前に所在する。

本遺跡の所在する蔵王町は、奥羽山脈の南部を形成する蔵王連峰の東麓に位置している。町域の西部は標高約1,700mの蔵王連峰から連なる高地、及びその麓部から連続した丘陵で、東に向かって徐々に標高を減じる。この丘陵は高木丘陵と呼ばれ、町域の大部分を占める。一方東部は町域の北部から南に流れる藪川の沖積作用によって形成された、標高80mほどの低地になっている。この低地の西端は高木丘陵に、北及び東は高木丘陵から枝状に張り出した愛宕山丘陵に囲まれ、円田盆地と呼ばれる盆地となっている。

円田盆地周辺の丘陵地帯は旧石器時代以降各時代の遺跡が数多く発見されており、この地が古くから人間の生活に適した環境であったことがうかがえる。盆地周辺の遺跡の中で最も古いものは、盆地北西部の前戸内遺跡で、旧石器時代後期の柳葉形尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡は高木遺跡や湯坂山B遺跡など、高木丘陵頂部に立地するものが多い。弥生時代に入ると遺跡分布の中心が丘陵頂部から丘陵端部に移り、[円田式]標識遺跡である西浦遺跡をはじめとした多くの遺跡が認められる一方、中沢A遺跡や愛宕山遺跡など、依然として丘陵頂部に立地する遺跡もまた見受けられる。このことは縄文時代から弥生時代にかけて生活形態に変化が生じ、それに伴って徐々に生活適地＝遺跡の立地も変化をはじめたものと理解される。古墳時代では、遺跡の立地自体はそれ以前の時期と差異はみられないものの、より一層低地生活志向が強く表れる。この時期の遺跡には県内古墳時代の最初期段階の集落跡である大橋遺跡をはじめ、台遺跡や伊原沢下遺跡など、盆地を取り囲むように分布しており、円田盆地を基盤とした生活圏が形成されていたことが推察される。愛宕山丘陵頂部には愛宕山遺跡、古峯神社古墳、夕向原古墳などの前方後円墳が営まれ、高木丘陵にも宋膳堂古墳、天王古墳群などが築かれた。また、堀の内遺跡のようにこの時代以降平安時代にいたるまで連続的に集落が営まれた複合遺跡も見受けられる。古代以降の遺跡は都遺跡、下永向山遺跡、戸の内脇遺跡などがある。この地に、笹谷峠を越えて陸奥・出羽両国を結ぶ笹谷街道が整備されたのもこの時期のことである。中世以降、この地は笹谷街道を軸とした戦略上の要衝地として花盾館跡や平沢館跡など、多くの城館が営まれた(第1図)。

本遺跡は円田盆地西部に接続する標高約100mの微高地上に立地している。この微高地は北部を流れる藪川によって開析された小規模な段丘で、北東方向に緩やかに傾斜している。遺跡範囲はこの微高地全体であるが、遺物の散布は遺跡範囲東端部に集中している。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	諏訪館前遺跡	縄文～古墳・平安	11	中沢A遺跡	縄文～中世	21	西脇古墳	古墳
2	前戸内遺跡	旧石器～縄文・古代	12	伊原沢下遺跡	古墳	22	中屋敷古墳	古墳
3	高木遺跡	縄文	13	台遺跡	弥生～古墳・平安	23	宋膳堂古墳	古墳
4	鞆堂山遺跡	縄文～弥生・古代	14	堀の内遺跡	縄文～古代	24	天王古墳群	古墳
5	新並遺跡	縄文	15	十郎田遺跡	古代	25	諏訪館横穴墓群	古墳
6	西浦遺跡	縄文～弥生・平安	16	西小屋館跡	中世	26	都遺跡	縄文～古代
7	諏訪館遺跡	弥生～古墳	17	六角上遺跡	古代	27	花楸館跡	中世
8	小高遺跡	縄文～弥生・古代	18	愛宕山遺跡	古墳	28	平沢館跡	中世
9	赤鬼上遺跡	弥生・平安・中世	19	古峯神社古墳	古墳			
10	大橋遺跡	縄文～古墳・平安	20	夕向原古墳群	古墳			

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

## 2 調査にいたる経緯と調査方法

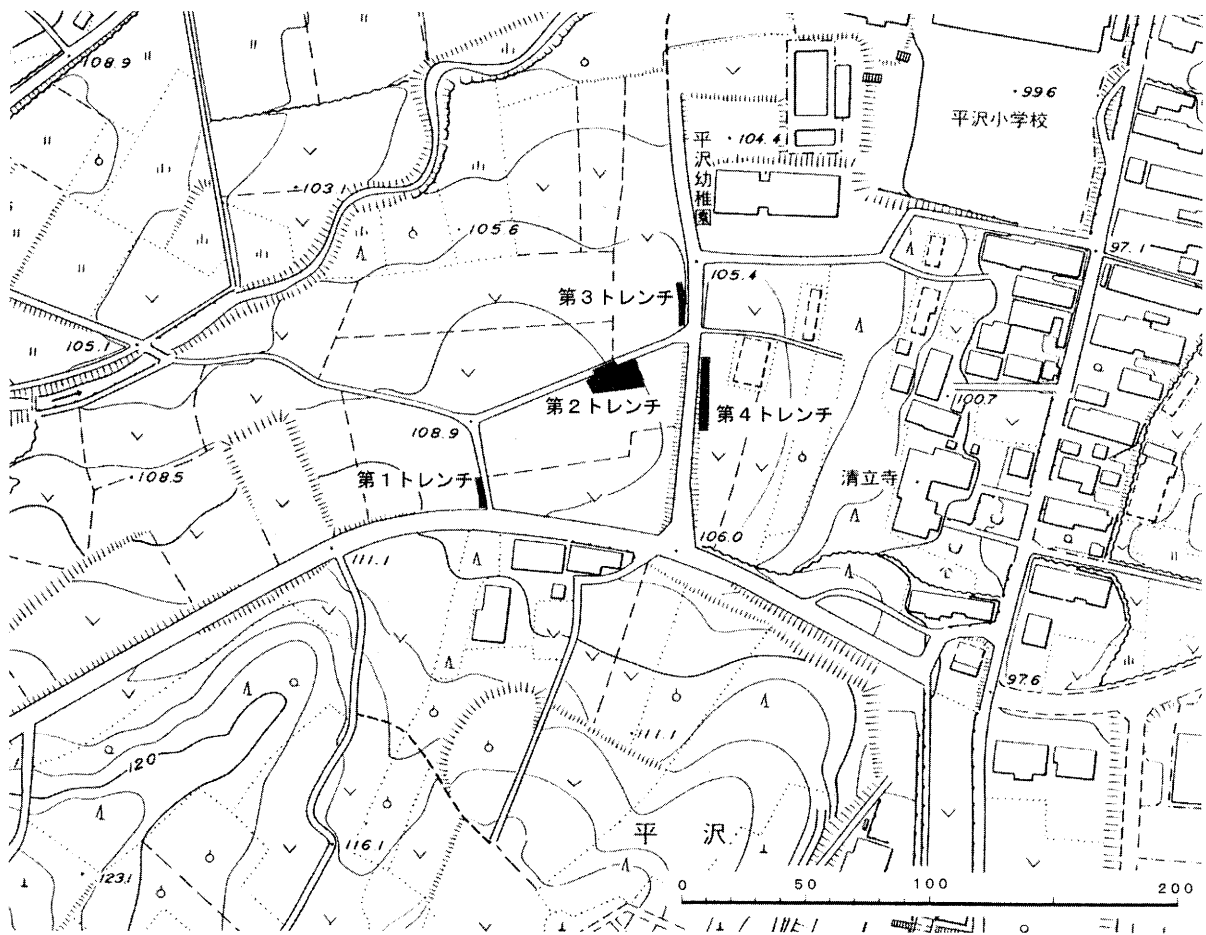
### 〔調査にいたる経緯〕

今回の発掘調査は、農道山の入寺前線改良工事に先立つものである。

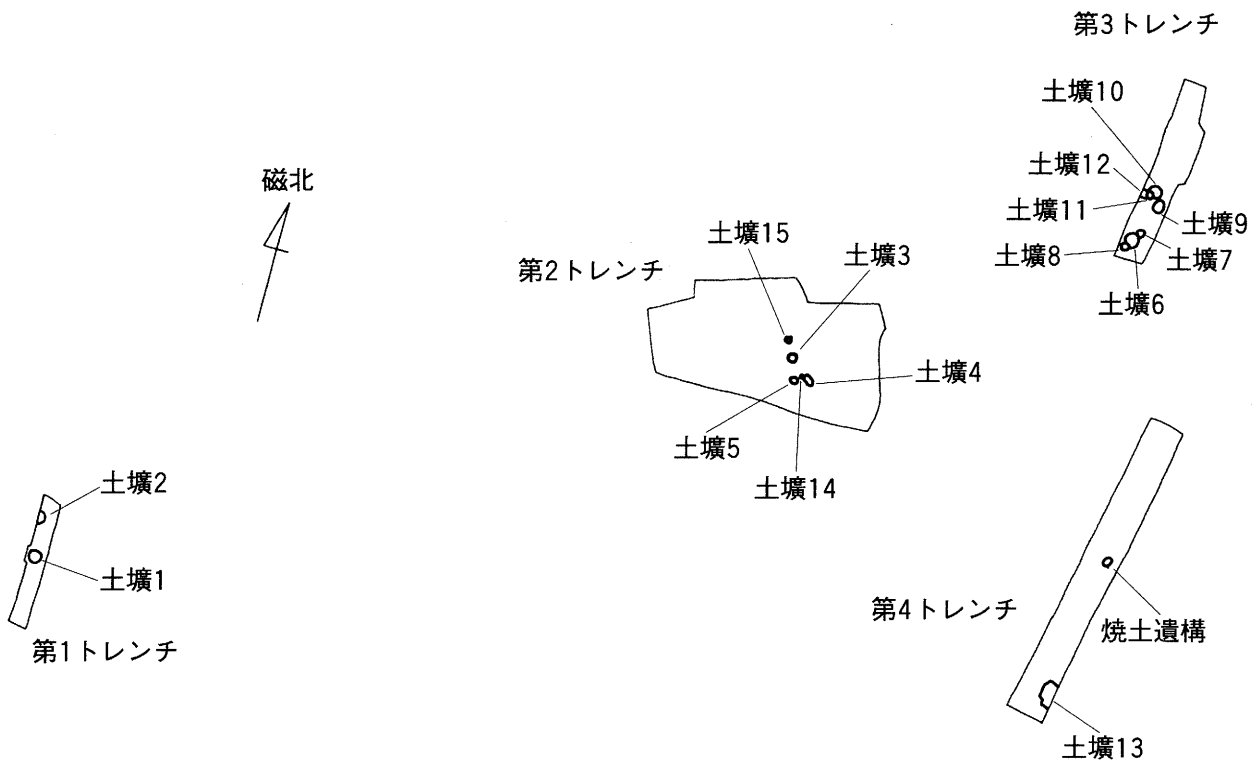
平成元年度に計画された農道山の入寺前線の改良事業は、諏訪館前遺跡として周知された地域の東部及び中部に通っている農道を拡幅するというものであったことから、宮城県教育委員会文化財保護課・蔵王町農林課・蔵王町教育委員会社会教育課の3者が埋蔵文化財の保存について協議を行った。その結果、工事対象地域のうち諏訪館前遺跡に係る部分の地下遺構の状況を把握する必要性から、現道及び拡幅範囲を対象に遺構確認調査を実施することとした。遺構確認調査は平成12年11月6日～11月14日及び平成13年5月10日～5月14日の合計9日間実施し、表土を除去した段階で土壌などの遺構を確認した。この結果に基づいて再度協議を行った結果、農道の改良計画は基本計画どおりに実施すること、工事を実施する前に地下遺構について詳細な発掘調査を実施することが決定し、平成13年5月15日に第1トレンチの、平成13年7月6日から8月28日にかけて第2～第4トレンチの詳細な発掘調査を実施した。

### 〔調査方法〕

調査範囲及び遺構の配置図については平板測量によって記録した。遺構については平面図及び断面図を作成した。その際平面図は遺構を横切る線分を設定し、その線分を基準として20分の1の縮尺図を作成した。線分の端点は遺構配置図を作成する際に記入しておき、遺構の位置及び方位が正確に表せるよう配慮した。また、35mmカラー写真による記録もあわせて行った。遺構精査時に出土した遺物は、遺構毎に出土層位を明確にしながら取り上げた。



第2図 遺跡周辺の地形と調査区



第3図 遺構配置図

### 3 発見された遺構と出土遺物

今回の調査において発見された遺構は土壇15基・焼土遺構1基で、それらの遺構の内  
外から土師器・須恵器・弥生土器が出土している。

#### 〔土 壇〕

##### 第1号土壇 (第4図)

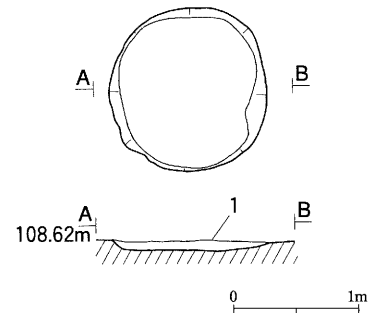
[位置・確認面] 第1トレンチ地山面で確認。

[形状・規模] 平面形は直径約120cmの円形である。壁面は緩やかな傾斜をもって  
立ち上がる。深さは最大で約6cmである。

[底 面] 直径約106cmの不整円形で、ほぼ平坦で  
ある。

[堆 積 土] 1層である。

[遺 物] 出土していない。



No.	土 色	土 質	備 考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒含む

第4図 第1号土壇

##### 第2号土壇 (第5図)

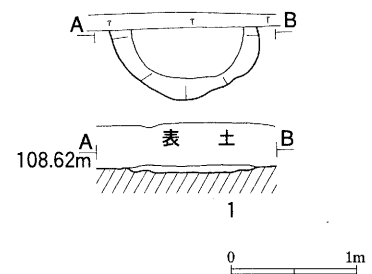
[位置・確認面] 第1トレンチ地山面で確認。

[形状・規模] 遺構が調査区外にかかるため全体形は把握できないが、平面形は直径  
約120cmの円形を基調とするものと考えられる。壁面は緩やかな傾  
斜をもって立ち上がる。深さは最大で約4cmである。

[底 面] 直径約90cmの不整円形を基調とする  
ものと考えられる。ほぼ平坦である。

[堆 積 土] 1層である。

[遺 物] 出土していない。

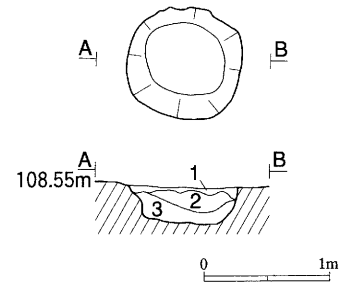


No.	土 色	土 質	備 考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒含む

第5図 第2号土壇

### 第3号土壙 (第6図)

- [位置・確認面] 第2トレンチ地山面で確認。
- [形状・規模] 平面形は直径約96cmの不整円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最大で約28cmである。
- [底面] 長軸約68cm、短軸約58cmの不整楕円形で、わずかな凹凸がある。
- [堆積土] 3層に分けられる。いずれも人為的な埋め戻しと考えられる。
- [遺物] 底面から、内外ともナデ調整を行った土師器の小片が出土したが、図示できなかった。

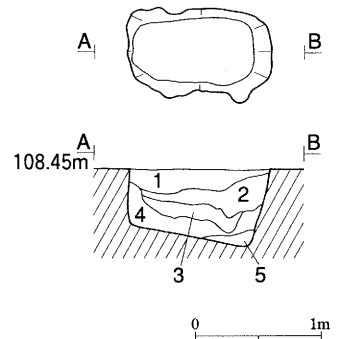


No.	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	地山・灰白色粘土小ブロック含む
2	7.5YR4/4 褐色	シルト	地山小ブロック多く含む
3	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む

第6図 第3号土壙

### 第4号土壙 (第7・8図)

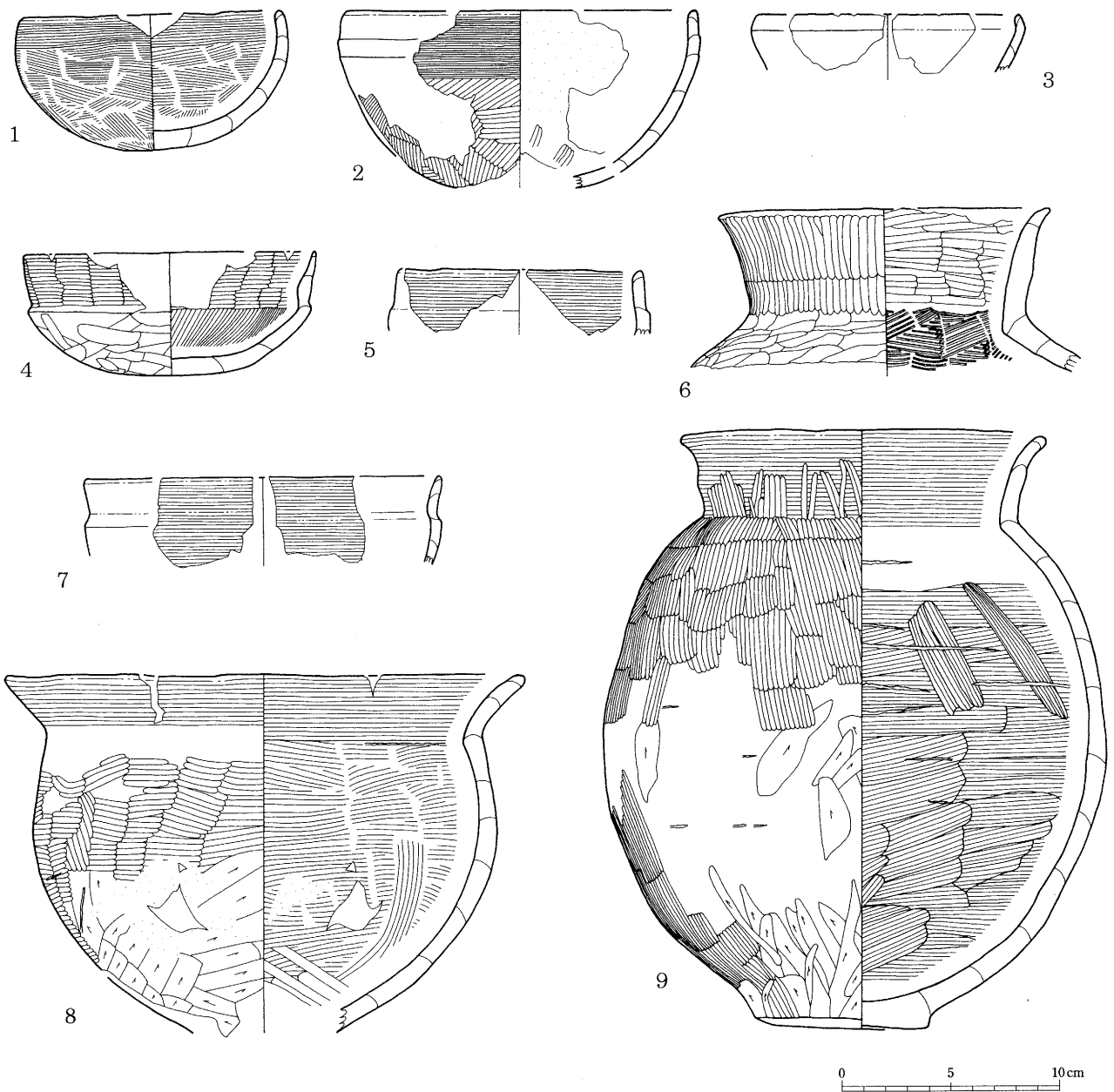
- [位置・確認面] 第2トレンチ地山面で確認。
- [形状・規模] 平面形は長軸約114cm、短軸約64cmの不整長方形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最大で約60cmである。
- [底面] 長軸約96cm、短軸約50cmの不整長方形で、長軸方向に傾斜している。
- [堆積土] 5層に分けられる。いずれも自然堆積と考えられる。
- [遺物] 堆積土、底面から土師器が出土し、9点が図示できた(第8図)。器種は坏・甕で、坏は6点と主体的である。



No.	土色	土質	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山粒わずかに含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山粒含む
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山粒わずかに含む
4	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山小ブロック多く含む
5	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山・灰白色粘土粒含む

第7図 第4号土壙



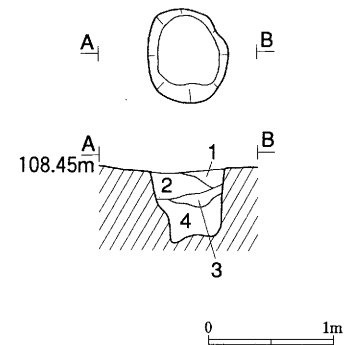


No.	器種別	出土位置	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	分類	図版
1	土師器 坏	底面直上	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	—	10.8	—	6.2	E	8-3
2	土師器 坏	底面	体部ミガキ・口縁部ヨコナデ	体部ミガキ	—	13.8	—	?	D	8-2
3	土師器 坏	底面直上	?	?	?	12	?	?	C	
4	土師器 坏	堆積土	体部ケズリ・口縁部ミガキ	体部ナデ・口縁部ミガキ	ケズリ	13.4	—	5.6	A 2	8-1
5	土師器 坏	底面直上	ヨコナデ	ヨコナデ	?	11	?	?	A 2	
6	土師器 甕	底面直上	ミガキ	体部ハケメ・口縁部ミガキ	?	15	?	?		8-5
7	土師器 坏	堆積土	ヨコナデ	ヨコナデ	?	16	?	?	A 2	
8	土師器 甕	堆積土	体部ケズリ/ミガキ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	?	23.4	?	?		8-4
9	土師器 甕	堆積土	体部ケズリ/ミガキ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	ケズリ	16	7.9	27.3		8-6

第8図 第4号土壌出土遺物

### 第5号土壌 (第9図)

- [位置・確認面] 第2トレンチ地山面で確認。
- [形状・規模] 平面形は長軸約7.4cm、短軸約6.4cmの隅丸長方形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最大で約5.6cmである。
- [底面] 直径約5.4cmの不整形円で、中央部がやや盛り上がる。
- [堆積土] 4層に分けられる。いずれも自然堆積と考えられる。
- [遺物] 堆積土から土師器の小片が出土したが、図示できなかった。



No.	土色	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山粒わずかに含む
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山粒多く含む
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山粒わずかに含む
4	7.5YR2/3 極暗褐色	シルト	地山ブロック非常に多く含む

第9図 第5号土壌

### 第6号土壌 (第10図)

- [位置・確認面] 第3トレンチ地山面で確認。
- [重複] 第7・8号土壌と重複し、これらの中で最も新しい。
- [形状・規模] 平面形は直径約150cmの円形である。壁面は急な傾斜をもって立ち上がる。深さは最大で約62cmである。
- [底面] 長軸約102cm、短軸約90cmの楕円形で、中央部がややくぼむ。
- [堆積土] 3層に分けられる。いずれも人為的な埋め戻しと考えられる。
- [遺物] 出土していない。

### 第7号土壌 (第10図)

- [位置・確認面] 第3トレンチ地山面で確認。
- [重複] 第6号土壌と重複し、これよりも古い。
- [形状・規模] 平面形は直径約80cmの不整形円形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最大で約28cmである。
- [底面] 直径約50cmの不整形円で、ほぼ平坦である。
- [堆積土] 1層である。

[遺物] 出土していない。

### 第8号土壙 (第10図)

[位置・確認面] 第3トレンチ地山面で確認。

[重複] 第6号土壙と重複し、これよりも古い。

[形状・規模] 平面形は直径約80cmの円形である。壁面は急な傾斜をもって立ち上がる。深さは最大で約54cmである。

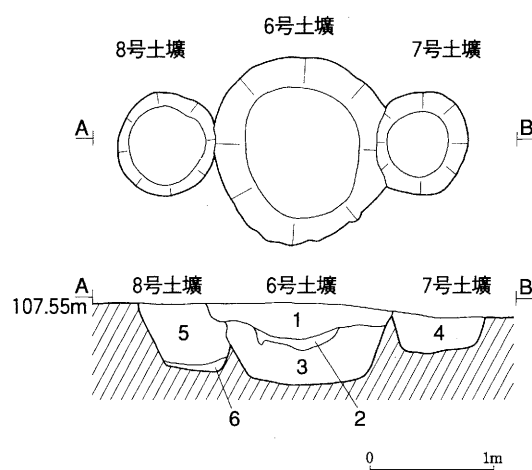
[底面] 直径約60cmの不整円形で、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に分けられる。

[遺物] 出土していない。

No.	土色	土質	備考
1	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	地山ブロックわずかに含む
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物非常に多く含む
3	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	地山粒わずかに含む
4	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	地山粒わずかに含む
5	7.5YR4/6 褐色	シルト	地山ブロック非常に多く含む
6	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	地山粒多く含む

第10図 第6・7・8号土壙



### 第9号土壙 (第11図)

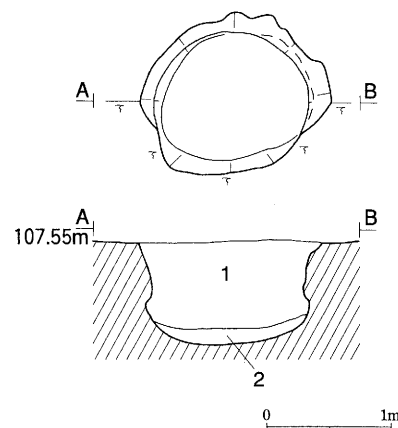
[位置・確認面] 第3トレンチ地山面で確認。

[形状・規模] 平面形は直径約150cmの不整円形である。壁面は半ばでオーバーハングする。深さは最大で約80cmである。

[底面] 直径約120cmの不整円形で、緩やかに湾曲する。

[堆積土] 2層に分けられる。

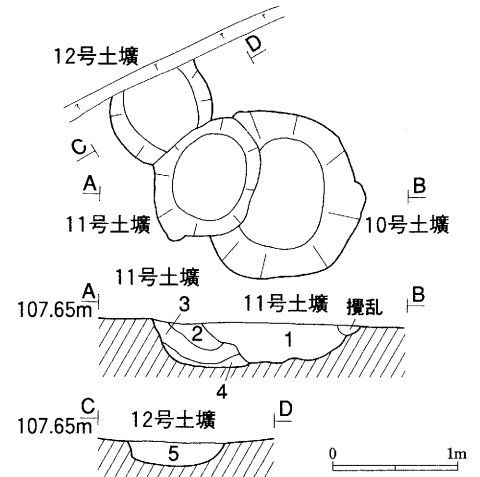
[遺物] 堆積土から土師器の小片が出土したが、図示することができなかった。



No.	土色	土質	備考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	粘性強い 地山粒わずかに含む

第11図 第9号土壙

No.	土色	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	地山小ブロックわずかに含む
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む
3	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック多く含む
4	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	地山小ブロックわずかに含む
5	10YR3/2 黒褐色	シルト	地山ブロック非常に多く含む



第12図 第10・11・12号土壌

### 第10号土壌 (第12図)

[位置・確認面] 第3トレンチ地山面で確認。

[重複] 第11号土壌と重複し、これよりも新しい。

[形状・規模] 平面形は直径約140cmの不整円形である。壁面は緩やかに立ち上がる。深さは最大で約32cmである。

[底面] 長軸約90cm、短軸約60cmの楕円形で、緩やかに湾曲する。

[堆積土] 1層である。

[遺物] 出土していない。

### 第11号土壌 (第12図)

[位置・確認面] 第3トレンチ地山面で確認。

[重複] 第10・12号土壌と重複し、第10号土壌より古く第12号土壌より新しい。

[形状・規模] 平面形は長軸約110cm、短軸約80cmの不整楕円形である。壁面は緩やかに立ち上がる。深さは最大で約34cmである。

[底面] 長軸約60cm、短軸約54cmの楕円形で、ほぼ平坦である。

[堆積土] 4層に分けられる。

[遺物] 出土していない。

### 第12号土壌 (第12図)

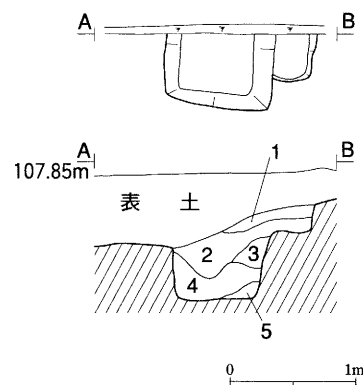
[位置・確認面] 第3トレンチ地山面で確認。

[重複] 第11号土壌と重複し、これよりも古い。

- [形状・規模] 遺構が調査区外にかかり、重複もあるため全体形は把握できないが、平面形は直径約80cmの不整形円形を基調とするものと考えられる。壁面は緩やかに立ち上がる。深さは最大で約20cmである。
- [底面] 直径54cmの不整形円形を基調とするものと考えられ、ほぼ平坦である。
- [堆積土] 1層である。
- [遺物] 出土していない。

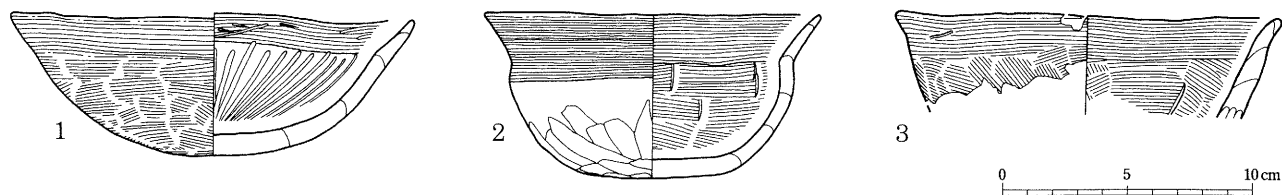
### 第13号土壙 (第13・14・15図)

- [位置・確認面] 第4トレンチ地山面で確認。
- [形状・規模] 遺構が調査区外にかかるため全体形は把握できないが、平面形は長軸約60cm以上の長方形を基調とするものと考えられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最大で約60cmである。
- [底面] 長軸50cm以上の長方形を基調とするものと考えられ、ほぼ平坦である。
- [堆積土] 5層に分けられる。いずれも自然堆積と考えられる。
- [遺物] 堆積土、底面から土師器が出土し、11点が図示できた(第14・15図)。器種は坏・鉢・甕・壺で、甕は7点と主体的である。



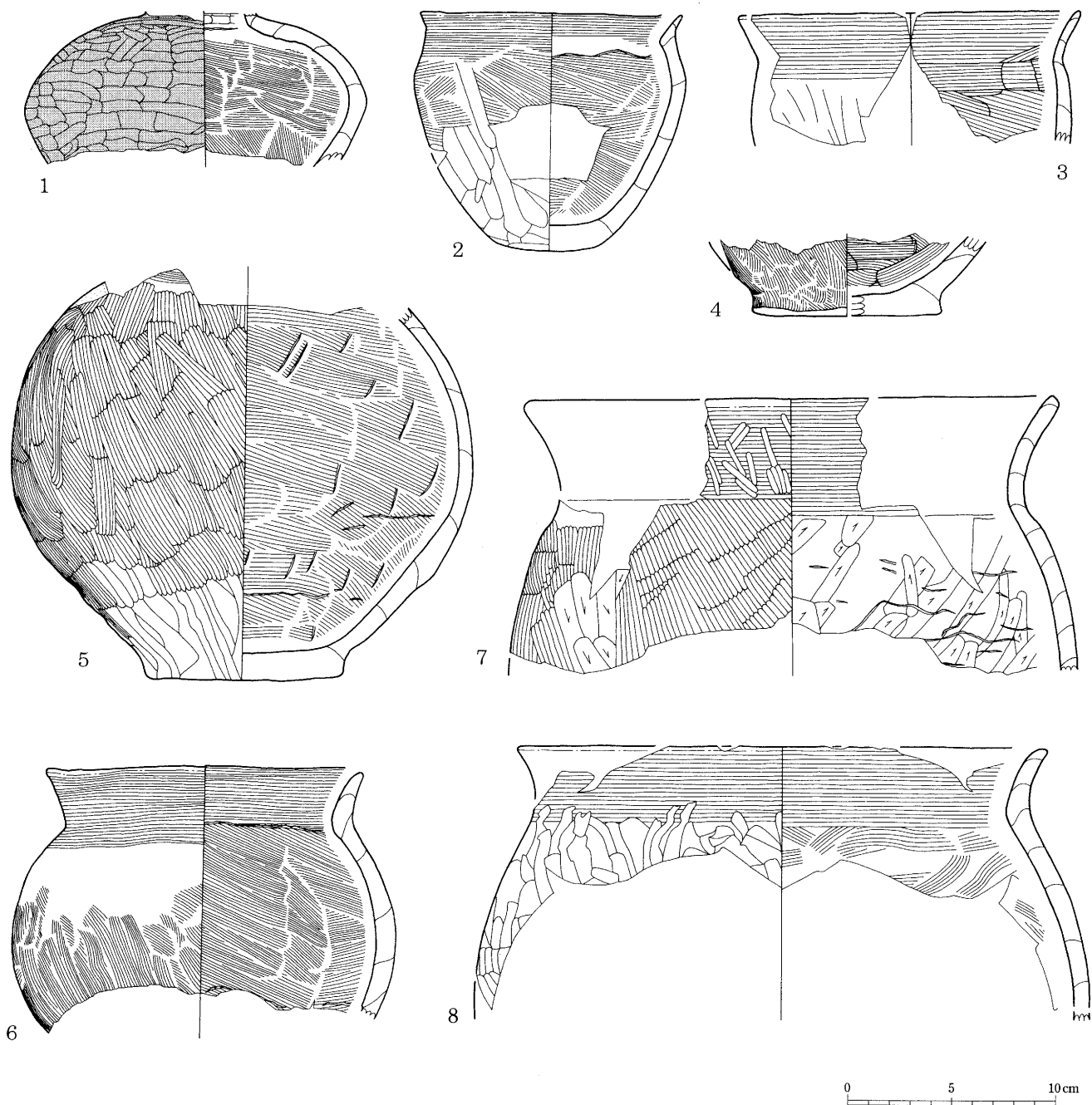
No.	土色	土質	備考
1	7.5YR2/2 黒褐色	シルト	地山粒わずかに含む
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山粒含む
3	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山ブロック非常に多く含む
4	5YR2/1 黒褐色	シルト	地山ブロック含む
5	5YR2/1 黒褐色	シルト	地山ブロック非常に多く含む

第13図 第13号土壙



No.	器種別	出土位置	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	分類	図版
1	土師器 坏	底面直上	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	体部ミガキ・口縁部ヨコナデ	—	15.8	—	5.7	B	8-8
2	土師器 坏	堆積土	体部ケズリ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	—	12.2	—	6.4	A1	8-7
3	土師器 鉢	確認面	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	?	15.1	?	?		8-9

第14図 第13号土壙出土遺物(1)

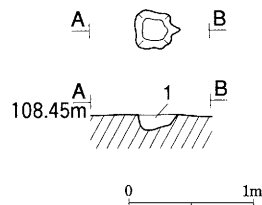


No.	器種別	出土位置	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	分類	図版
1	土師器 壺	堆積土	体部ミガキ・朱彩	体部ナデ・頸部ミガキ	?	?	?	?		8-10
2	土師器 甕	堆積土	体部ミガキ/ナデ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	ケズリ	12.6	5	11.3		8-11
3	土師器 甕	堆積土	体部ミガキ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	?	16.2	?	?		8-12
4	土師器 甕	確認面	ナデ	ナデ	ケズリ	?	9	?		
5	土師器 甕	底面直上	体部ミガキ・頸部ナデ	ナデ	ケズリ	?	9.4	?		9-2
6	土師器 甕	堆積土	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	?	14.8	?	?		9-1
7	土師器 甕	堆積土	体部ミガキ/ケズリ・口縁部ヨコナデ	体部ケズリ・口縁部ヨコナデ	?	25	?	?		9-4
8	土師器 甕	堆積土	体部ケズリ/ミガキ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	?	25.2	?	?		9-3

第15図 第13号土壙出土遺物(2)

第14号土壌 (第16図)

- [位置・確認面] 第2トレンチ地山面で確認。
- [形状・規模] 平面形は一辺約30cmの不整形である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最大で約12cmである。
- [底面] 一辺約20cmの方形で、やや傾斜している。
- [堆積土] 1層である。
- [遺物] 出土していない。

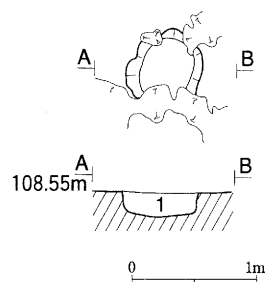


No.	土色	土質	備考
1	5YR2/4 極暗赤褐色	シルト	焼土ブロック・木炭非常に多く含む

第16図 第14号土壌

第15号土壌 (第17図)

- [位置・確認面] 第2トレンチ地山面で確認。
- [形状・規模] 攪乱を受けているため全体形は把握できないが、直径約60cmの不整形円形を基調とするものと考えられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最大で約20cmである。
- [底面] 直径約50cmの不整形円形を基調とするものと考えられ、ほぼ平坦である。
- [堆積土] 1層である。
- [遺物] 出土していない。



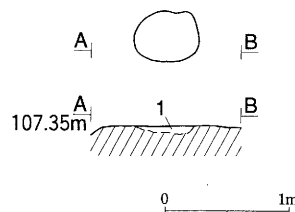
No.	土色	土質	備考
1	5YR3/4 暗赤褐色	シルト	焼土粒・木炭多く含む

第17図 第15号土壌

〔焼土遺構〕

第1号焼土遺構 (第18図)

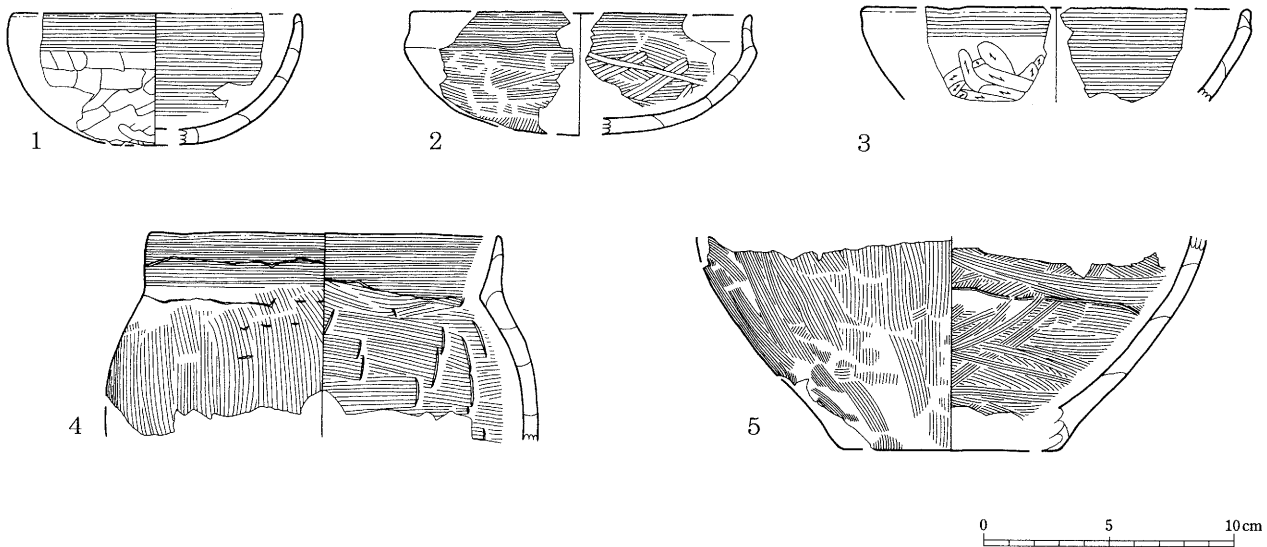
- [位置・確認面] 第4トレンチ地山面で確認。
- [形状・規模] 長軸約54cm、短軸約40cmの不整形楕円形の範囲で、地山が火熱を受けて赤褐色に変色している。変色の深さは10cmほどである。



第18図 第1号焼土遺構

〔遺構外出土遺物〕 (第19図)

表土、攪乱から土師器、須恵器、弥生土器が出土した。このうち土師器5点が図示できた。これらはいずれも遺構内から出土した遺物と類似した特徴を持っている。また、図示できなかった土師器の中には底部に糸切り痕跡の見られるもの、内面に黒色処理を施したもの（いずれも坏と考えられる）などが見られる。弥生土器は小片のため図示できなかったが、列点文が見られる。



No.	器種別	出土位置	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	分類	図版
1	土師器 坏	2トレンチ攪乱	体部ケズリ・口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	—	11.6	—	5.1	(E)	9-6
2	土師器 坏	表土	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ/ミガキ・口縁部ヨコナデ	—	13.4	—	4.8	(A2)	9-5
3	土師器 坏	攪乱	体部ケズリ・口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	?	15.2	?	?	(C)	
4	土師器 甕	表土	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	体部ナデ・口縁部ヨコナデ	?	14	?	?		9-7
5	土師器 甕	3トレンチ表土	ナデ	ナデ	?	?	8.4	?		9-8

(分類は、考察にある坏の分類に対応する器形を括弧書きした)

第19図 遺構外出土遺物



## 4 遺物・遺構の検討

今回の調査では、15基の土壙と1基の焼土遺構を検出し、その内外から遺物が出土した。しかし遺物を伴った遺構が少ないうえに遺物の量も乏しいため、遺物の編年的特徴や遺構の機能時期などについて詳細な考察を加えることは難しいと判断される。ゆえにここでは、特に遺構から出土した遺物の特徴を示すとともに編年的位置付けを考える。また、遺構については形態的類似点に基づいて分類した上で若干の検討を加える。

### 〔出土遺物〕

本調査において遺物が出土した遺構は第3・4・5・9・13号土壙だが、第4・13号土壙以外の出土遺物はいずれも量的に乏しいうえに小片で器種の確定もできない。よってここでは第4・13号土壙の出土遺物について検討を加える。また、これらの遺構では底面付近からの出土遺物と堆積土あるいは確認面からの出土遺物との間で多くの接合関係が認められたことから、各遺構の埋没過程には時間幅がないものと判断して、各遺構の出土遺物を一括で取り扱う。

第4・13号土壙の出土遺物は土師器坏・鉢・壺・甕である。以下に器種ごとの特徴を記す。

○坏 8点あり、製作にロクロを使用していない。全体形の判明するものはいずれも丸底である。口縁部の形態により以下のように細分することができる。

A：体部と口縁部との境界の内面に明瞭な稜、外面に明瞭な屈曲を持つもの。さらに、口縁部が直線的に外傾するもの（A1）、ほぼ垂直に立ち上がるもの（A2）に細分できる。

B：体部と口縁部との境界の内面に不明瞭な稜、外面に不明瞭な屈曲を持つもの。

C：体部と口縁部との境界の内面に屈曲、外面に稜を持ち、口縁部が内傾するもの。

D：体部と口縁部との境界の外面に2段の稜を持つもの。

E：体部と口縁部との境界に段・稜を持たず、内湾気味に立ち上がるもの。

この中で主体を占めるのはA2（3点）である。

○鉢 1点のみで全体形は把握できないが、製作にロクロを使用せず、体部から口縁部まで直線的に外傾する。

○壺 1点のみで全体形は把握できないが、製作にロクロを使用せず、肩部が張る。

○甕 10点あり、製作にロクロを使用していない。体部はいずれも球形～長球形である。口縁部は、判明しているものはいずれも直線的か、あるいはやや外反気味に外傾する。

これらの遺物はいずれも、その形態的特徴から古墳時代中期南小泉式に位置付けられるものと考えられる。南小泉式については細分が検討されている（加藤：1989）が、今回の発掘調査によって得られた資料は量的に乏しく、器種の欠落もみられることから総合的な検討を加えることは難しい。従ってここでは、おおまかに南小泉式期の遺物であると位置付けるに止めたい。

なお、ここで検討を加えることはしなかったものの、遺構外から出土した遺物で図示することができたものはいずれも、その形態的特徴が遺構出土のものと同様であることから、これらもまた南小泉式期のものと考えられる。

## 〔遺 構〕

検出した15基の土壇を、その形態的特徴から以下のように分類するとともに、その機能時期・用途などについて検討を加える。

### A類：第4・13号土壇

平面形は長方形を基調とし、底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がるもの。南小泉式期の遺物を伴うことから、遺構の機能時期もこの時期に求めることができる。用途については確定することはできない。

### B類：第1・2・6・10号土壇

平面形は直径1.2～1.5mの円形を基調とするもの。底面はほぼ平坦～やや湾曲し、壁は外傾する。用途、機能時期を確定することはできない。

### C類：第9号土壇

平面形は直径1.5mの円形を基調とし、底面はやや湾曲し、壁は半ばでオーバーハングするもの。形態的には縄文時代のいわゆる「フラスコ状土壇」に類似するが、本遺構からの出土遺物もなく、機能時期・用途を確定することができない。

### D類：第3・7・8・11・12号土壇

平面形は直径70～90cmの円形～隅丸方形を基調とするもの。底面はほぼ平坦～やや内湾し、壁は外傾する。用途、機能時期を確定することはできない。

### E類：第5号土壇

平面形は長軸約70cmの隅丸長方形を基調とし、底面は凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。用途、機能時期を確定することはできない。

### F類：第14・15号土壇

堆積土に多量の焼土・木炭が混入されているもの。底面や壁面に火熱を受けた形跡はなく、炉とも考えられるが詳細は不明である。遺物の出土はなく、機能時期も確定できない。

## 5 まとめ

- 諏訪館前遺跡は円田盆地北西部の高木丘陵東麓部の北東斜面に位置しており、標高は約100m、盆地底部との比高は約20mである。
- 今回、遺跡東部において約500㎡を発掘調査したところ、土壇15基、焼土遺構1基を検出した。
- 検出された遺構の機能時期は判明しているものは古墳時代中期南小泉式期に位置付けられる。
- 検出された遺構の用途は判明しない。
- 遺構の内外から出土した遺物によって、本遺跡は弥生時代、古墳時代中期、奈良時代以降の遺跡であることが判明した。

### 引用・参考文献

- 加藤 道男 (1989) : 「宮城県における土師器研究の現状」 『考古学論叢Ⅱ』
- 佐藤 洋 (1990) : 「南小泉遺跡 第16～18次調査報告書」 『仙台市文化財調査報告書第140集』
- 森 貢喜 (1991) : 「諏訪館前遺跡」 『「下草古城跡ほか」 宮城県文化財調査報告書第146集』
- 五十嵐康洋 (1998) : 「南小泉遺跡 第26次調査報告書」 『仙台市文化財調査報告書第225集』

写 真 图 版

第1トレンチ全景



第2トレンチ全景



第3トレンチ全景

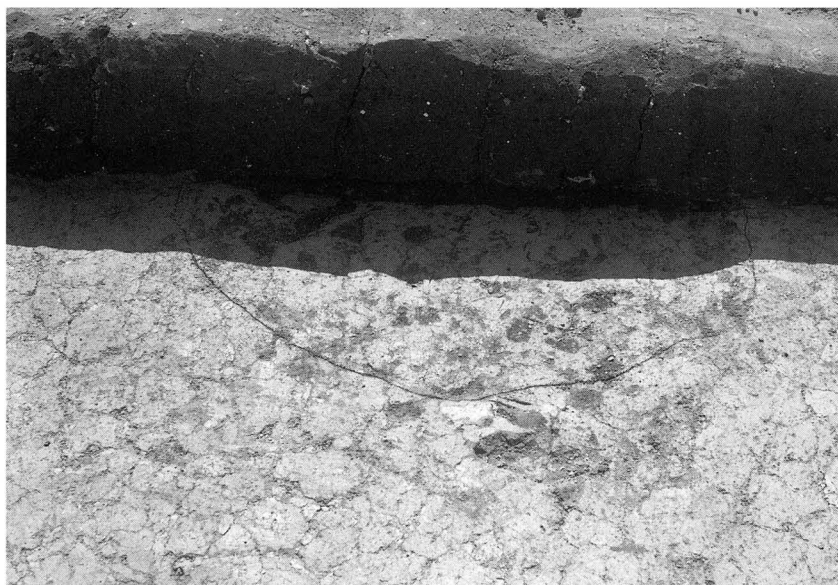


第4トレンチ全景

第1号土壙  
[完 堀]



第2号土壙  
[完 堀]



第3号土壙  
[完 堀]



第4号土壙  
[遺物出土状況]



第4号土壙  
[完掘]



第5号土壙  
[完掘]



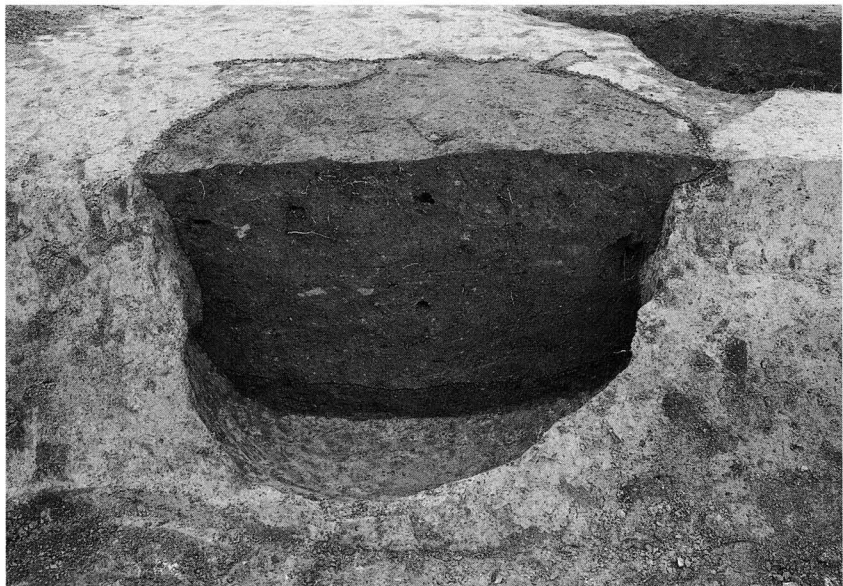
写真図版 4



第6・7・8号土壙  
[完 堀]



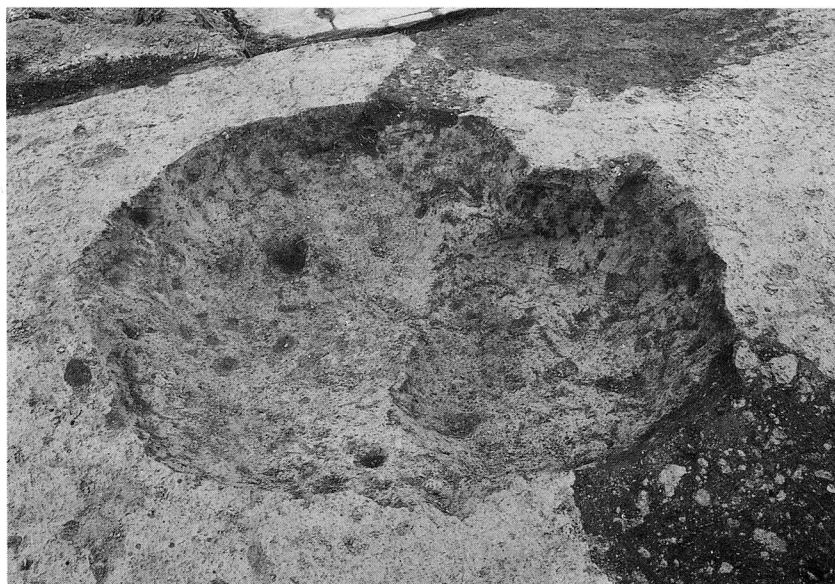
第9号土壙  
[断 面]



第9号土壙  
[完 堀]



第10・11号土壤  
[完掘]



第12号土壤  
[完掘]



第13号土壤  
[断面]



第14号土壤  
[断面]



第15号土壤  
[断面]



烧土遺構

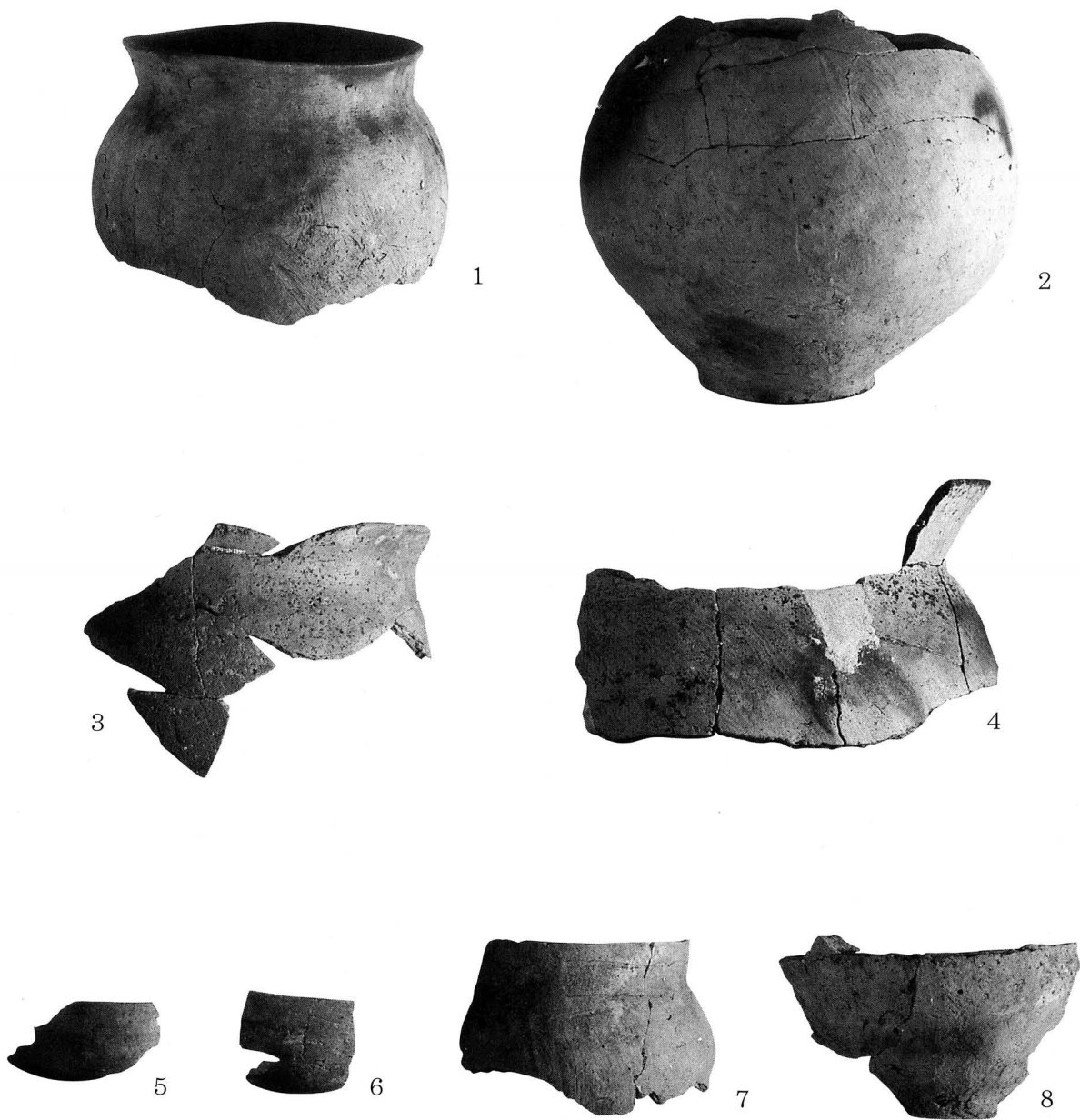




1~6 第4号土壤出土遺物

7~12 第13号土壤出土遺物

写真図版 8



1 ~ 4 第13号土壙出土遺物

5 ~ 8 遺構外出土遺物

写真図版 9

---

---

蔵王町文化財調査報告書第2集

# 諏訪館前遺跡

平成14年3月31日発行

発行 蔵王町教育員会  
宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10  
〒989-0892 TEL (0224) 33-3007

印刷 株式会社津田印刷  
柴田郡大河原町字東原町13-5  
TEL (0224) 52-5550

---

---

